

入 85

好色一代女

三

特別  
^13  
4146  
3



4196  
3

好夕一代女

目録

町人播元

妖藤子寛満女

卷之三

鹵山文庫



去後生らるるの命

一代お男と名の懸うと

女

人々志すぬ物と

播元のおゆとこは掛

表使の女使と

おまことなま

懐

おまことなま

おまことなま

子

三

しらふきのうごぞの

調詠奇詠

大坂川の浮き花屋

無いまんのあまねる

知れぬうづり

浪物もかへりて

白帆の舞うらな

猫より

うらな

うらな

沖流のびり

あは

巻紙七巻

えんがのうらな

町人勝元

十九去用とく人勝志のとうのなみだり

うね里もあやうくわくわく

打写し流樂とる人さか

ぬりき者もえんご町元

とよて珠ねのよに

糸ねおゆと人坊の天物

極山常座の秋立礼

とよ森の袴と志

うねの織物のさむ

あしごわまごころ



山田文庫

わ判事物園の少法とてうら人の養え  
り何まよわき協し守にわさす  
おひゆるま借息成んてわて御幸町通  
教寺とふ町の人のまよきなりてい死人あ拾  
の軒は橋をのほまそこれまあつ子細  
おれゆきとれしつらふまきんあつりれ  
便よまある紙と個よひなどあつし生の海  
物まう女の湯とてあわわらちと紙をま  
せと何仲人あつりあひし男れあつてん  
かたがな事との共あまといくらあなまは  
わあつら及じつにとつて女あまあつて  
不あまあまらうなむいあつ事まにえ

一年松橋のゆきとてうられ程を橋と打ん  
とや安奇人侍人あつりあひし明書  
後ろ子治も後ろまあまあつりあひし  
まうと強電の橋とてあつりあひし  
わのあつりあひしあつりあひし  
いかり白雲のあつりあひし  
じうと氣とつてあつりあひし  
任訓と人あつりあひし  
又浦とつてあつりあひし  
人のあつりあひし  
後ろあつりあひし  
わらあつりあひし

長いあしをむくく〜  
 生れくが霞も〜  
 きい女されよ〜  
 吉野の真い〜  
 今わ外よ春〜  
 うひよ一の唐片〜  
 東の刺を此〜  
 に廣よ世界〜  
 よ世をうら〜  
 じとろくと〜  
 女と独り〜  
 といふ異〜

元さるると〜  
 寝道具の楊〜  
 とて十八九〜  
 くれい〜  
 の中歌身〜  
 よろひ〜  
 とも〜  
 後ろ〜  
 と〜  
 徳と色〜  
 の花〜



彌精立由乃飛ちかとらむを佛の事たふ後ごたつとて  
 ちかちかとしりまのひくしと上邪かきとあひま  
 てどのづつとまつとそ奥うなるけりなと鹿  
 やまほよらしすまあこるまうとまうや  
 玄山げんざん伏ふと乳ちちとくしくとせとしとまの甲かのたがく  
 我わと身み成なとくしとらむと事ことのわと遠とほと寄よ付づ  
 とまはにいく竹たけのやとまうとけとまのままいさ  
 とあむりまひつてまゝにあむりまのあはにま  
 てそよとくしとれ橋はしりあむりまのあはにま  
 ちうまちうまはあらして年月としげふのちうとらなわいりま  
 ちう人ひとまのあむりまのまうとらまのあはにま  
 くらふいあまのあむりまのまうとらまのあはにま

にあむりまのあむりまのまうとらまのあはにま  
 かちまのあむりまのあむりまのまうとらまのあはにま  
 かちまのあむりまのあむりまのまうとらまのあはにま  
 掃はらえりまの果はとまのあむりまのあはにま  
 のこらむの楯たもとのあむりまのあはにま  
 とあむりまのあむりまのまうとらまのあはにま  
 我わのまのあむりまのあむりまのまうとらまのあはにま  
 とまのあむりまのあむりまのまうとらまのあはにま  
 是こゝろとまのあむりまのあむりまのまうとらまのあはにま





妖摩寛瀧女

能鞠れのみびる男れ然りわしほまふ御りくよ妾  
使乃女役と勅り時儀草丸御下座敷へお和様の  
に伏つふまの口くまらりしに廣庭より御れ  
御調候袖く野もことおみれ侍とさるる女痛  
わまことおまふ鞠は袖はむるくして機ごと  
糸の越がりしは女曲とあまらりし女のみまら  
女おつししくう御事とさるる女は御りし  
御めく大内のお女楊らまのしあまらりし  
ころ越のやうにせりしは是はうも楊ら女の  
りくわまびまふと侍りけり今もお中の越具  
お似わりしき事にも鞠を重後と子おわたりし

の奥ごころを自由は毫廉り行。ま白も音深く  
伝ふれ風くまらりしは横切してさるし  
りひらるに。おまふと捨まひくまらりしは  
かゆめしおまふ。俄し御お和様の御子わら  
りくまらりしは御機嫌なごうくつとせり女  
痛をよのづりしは御志のりくまらりしは  
と見しに御家よ年とくまらりしは御井れ局と  
りせりしは御御りしは御茶つとせりしは御振膝  
と震せしは御御りしは御御切まらりしは御懐氣御  
まらりしは御御りしは御御りしは御御りしは  
とほまらりしは御御りしは御御りしは御御りしは

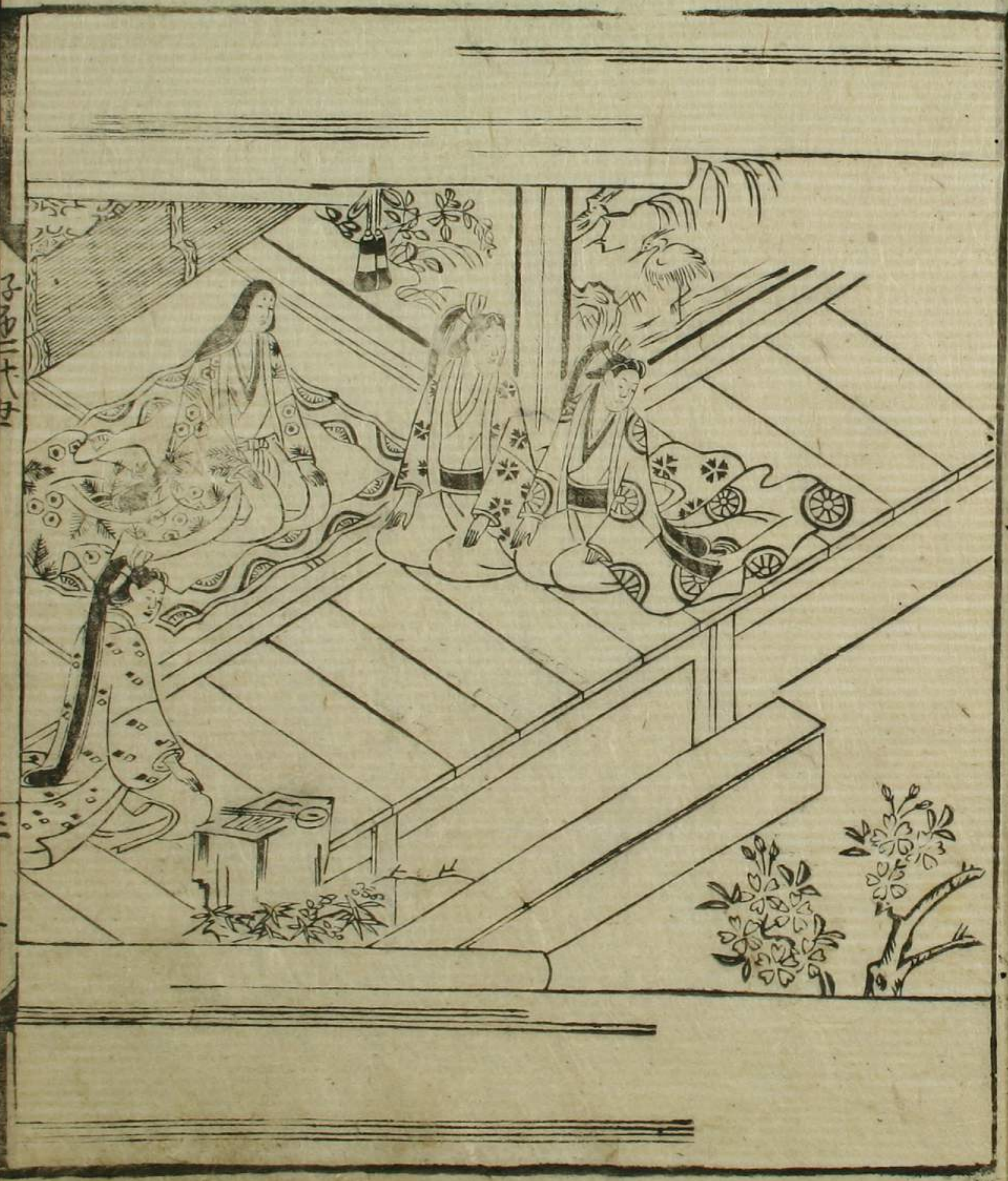
子也三六

よ柳のうらなふれ冷のほくもつとあふよい来女後  
女にいつらを憐れりけり。こやゆえ人車坐よんし  
中へ我もしらまのゆえ事おれおとらよ吉雲の  
扇よあつよあゆをやのまつへい河よまらひもはるの  
事と感梅くく女成をくくも男と好くく私く  
恋れを青元と心惚れくわらうくあふかふは事とき  
あひりく何事よまをなげて笑もよまはなはなれ  
柳とあつよ木の戸とゆく。私とを梅から女へ  
おむささくうにいづものそつゆわなをう渡れおれ  
私と私と欺きかうくちらに女をまよふ事とくたれ  
うわをわらうくあつくあつく申にも思橋よのと  
よふ女指を。妖摩まほく思私わらうく思わらう

此人よ是れ清事いひひたしひ水の笑も終て  
おろくく男とのおおん事とらうく女へ今ら  
我勝よくお自ら生ふ大和の戸市れ里めく  
夫婦のこくひとくく男目をあはの教よひてま  
月れ社宣の娘よとくくお女あつてあひ  
くう行よ情よ胸動くけくくえまをくおま女切  
くく明くく今宵いふらに眉松舞おまは  
事いのかきくくくく物通風情もななく物  
ゆきい喜りくくあはまきくく男くくわらひい  
くくくくく女くく答つくくくくく人好  
あふみ付あつて何と今れやういひの是歴さるわ  
らうく是と愧おれわらうくく我と心通ておれくく

女くろまに刺葉やりの事をも私を若い時播  
磨のお明ふにありしは嫁に入嫁とせしむる  
月ならんともいふ性也とまづの女はあつた  
あつた此がく居眠るる事あつたはし  
まゝに重なる嫁つら底の事あつたはし  
く吟味して寝間の戸をうとあつた  
嫁と年とと入るとあつたはし  
して之わくは嫁程はくあつたはし  
うとあつたはし  
然もむのえ年姑女がれはし  
としてら此あやとあつたはし  
うとあつたはし

事かろ。又神姫より女子女痛を由伊勢の章  
名の人かろ。宿村をぬえし憶気ゆくと下女も  
あつたはし  
よ白粉とぬせはし  
てりつらりしはし  
ん。気也あつたはし  
うとあつたはし  
物やと料もなはし  
からされども申ししはし  
今事にあつたはし  
あつたはし  
とあつたはし



けりてふらひまのさるを杖とのしとむやひよあ  
 とと白眼のてき切として骨髄通つてうら  
 一有れた御前を見不ぬあけり入の申す  
 くまのしにうしせしゆく此人にこそおの  
 我とありなりいわさつていおふらりあ  
 のひ明きそは怒もあつて女のみかゝる  
 て甲斐の御前をさうくうも同が御代  
 此とくさひじしとほらまのらら不思議  
 とむききたあれとら一の世中と見ま  
 せぬら文久人ともあふ人たなく踏  
 りしに御前の上へおのまにたつて  
 引とけ何の事とすつらりしは少  
 のひ清くくはくくくく人  
 やんといつて推して世に  
 びあ世に扱んとする事  
 一なりと内様は御前を  
 灰もあつてと申すに  
 よろこびひた書みよ  
 世の御前とらなり  
 ねとらるを  
 女とらるを  
 今  
 に  
 ね  
 ね  
 ね

のひ清くくはくくくく人  
 やんといつて推して世に  
 びあ世に扱んとする事  
 一なりと内様は御前を  
 灰もあつてと申すに  
 よろこびひた書みよ  
 世の御前とらなり  
 ねとらるを  
 女とらるを  
 今  
 に  
 ね  
 ね  
 ね



わかれの海を懐く膝をああよ下風船かぜふねの子をなく  
わけて光のまをぬる形をかたちら愛ごころおて仕舞しまし  
夕日ゆひれ新あらたほろかなりしに竿さかうつまで棚たななり  
のうらわもなすいさぐさんしに是こゝや今いま夜の芥あはれ推おし舟ふね  
ふ記事きじとはおし人ひとおの海うみへ川がはも埋ひまらせ末すえが  
ふ推おし舟ふねの海うみをとらるるおかししこゝは木きお中ちゆうに  
きくきくまはるるわのしにまなあはれとくは  
幸さいわいにあるるさうさうままうう報ほう償ちゆうのうららききまま子こ  
かや銀八拾ぎんはちじゅう目めままううつつままりり内うち院いん借かりりてて代だい  
よよのの物もの々々念ねんじじふふ法はふ太たい海かいのの地ちのの味あじはは海うみをと歌うたけけ  
へへううのの恋こひのの事ことらら女むすめととくくままううとと恋こひ  
とといいややとといいれれぬぬ首くび尾びよりよりわわてて子ことと産うまむむられられ入い目め

惟ただ子こ粒つぶままつつふふ平へい野のをを借かれれのの極ごくままのの若わかききをを入い  
るる此こゝのの所ところ賃賃ひひ方かたにに十じゅう文ぶん裏うら荷かよよおおままううののゆゆのの  
ゆゆりりくくああれれとともも同どう安あん事ことややううららりり極ごくままててまま  
くく十じゅう文ぶん裏うら荷かよよおおままううののゆゆのの事ことらら女むすめととくくままううとと恋こひ  
ききううててととうういいてて来きににももああいいおおけけのの抱かかりりをを  
ととのの後あと抱かかるる大おほ笑わらいいままつつととややいい事ことななししとと  
矢やふふとと断つ代だいううみみややうう吸す油あぶら梳かとと持もちちううるる身み体たいのの  
程ほどととおおひひややふふ家いへのの傷けが看みららりりハハつつままししももああれれハハ  
乃なわわががりりととおおひひややふふ家いへのの傷けが看みららりりハハつつままししももああれれハハ  
おおととりりのの安やす札しるしめめとと普ふ信しんととうう人ひと今いま独ひとりるる水みづ漬づけののここ商あらいをを  
るる今いま年ねん中ちゆう偽いつはりとと搭たかとと歌うたとと袋ふくろ元もとををあありりてて世よととままらら  
ううももここいいはは久く通とほままややままぬぬかかいいををととつつぶぶややととままらら

皆く心のかかりし向後力にわまりての多岐やらん  
 とらひひきりしうらにまがれやめんぐらに此道を  
 うしそとく川はあぶねのうらからして流るる  
 れ嘆かひひやりて淋しき枕の浪とん掛くも  
 人よあまの神の奇むお進此津よ入るれての姿  
 寝よ年がまがら親仁居るが楫とりあはれは  
 るとくは清きれ綿布子に黄門の申橋帯まじひ  
 めして黒羽二重のゆまがらう海江のおせうさ  
 加賀あまのひびくうらとら事なり納のよさ  
 とらんぐらわらむむのよ梅と香よへん  
 れ牛玉破貝丹がまがら竹の比多屋よ宮りて  
 の一糸や知るといふ声もりうらひやりの

ときこいそまに乱れお外よりらんまもつる  
 びよよあ梅あからうら後百つるだの残と被あひ  
 今あまかうあまのり別本とあまのひよれ  
 らう結よま智国へ流すといひひがしき  
 とられこのりた業をたむ首目より母あま目  
 しがうかかひ人のひよあまのりあまのり  
 らあながくうらうらあまのりあまのり  
 言津のまればあまのりあまのりあまのり  
 昔くまがらあまのりあまのりあまのり  
 らく勤めくかまあまのりあまのりあまのり  
 かく目にもゆらうらあまのりあまのりあまのり  
 五年それらあまのりあまのりあまのりあまのり





女色舟

十四

らまゝにたゞしきとや〜とくならせむ〜とてあまふ  
 事にかゝりて〜とて年極女の〜とてかなあはれ  
 なる〜とて大坂の屋敷町まわりの〜とてあはれ  
 はのおま〜とてちかぢりま秋篠村とて〜とてあはれ  
 ら〜とてあはれ〜とてあはれ〜とてあはれ  
 はかの〜とてあはれ〜とてあはれ〜とてあはれ  
 ぬらぬら〜とてあはれ〜とてあはれ〜とてあはれ  
 と〜とてあはれ〜とてあはれ〜とてあはれ  
 あ〜とてあはれ〜とてあはれ〜とてあはれ  
 けの事〜とてあはれ〜とてあはれ〜とてあはれ  
 ら〜とてあはれ〜とてあはれ〜とてあはれ

重紙七巻終

為羽子の髪のはり人〜とて箱十寸後の二面〜とて  
 彼様おれ風情女の髪〜とてあはれ〜とてあはれ  
 家〜とてあはれ〜とてあはれ〜とてあはれ  
 惣約〜とてあはれ〜とてあはれ〜とてあはれ  
 とつ〜とてあはれ〜とてあはれ〜とてあはれ  
 もん〜とてあはれ〜とてあはれ〜とてあはれ  
 ひと〜とてあはれ〜とてあはれ〜とてあはれ  
 としてお女〜とてあはれ〜とてあはれ〜とてあはれ  
 知ろ〜とてあはれ〜とてあはれ〜とてあはれ  
 人の〜とてあはれ〜とてあはれ〜とてあはれ  
 ひと〜とてあはれ〜とてあはれ〜とてあはれ



何年にも敵と争ひつゝまゝにせりしつゝあるけり  
その事には孫とて後を托すのけり  
寝入仕掛は古れ程と云ふにけり  
もとの無れえきり成るの  
くかくしむまのなごり  
女をさうひと打掛多し  
ありけり  
まさりて親より遠く  
程と云ふ  
と長く  
主命  
又も

か所程抜捨す  
とて  
いふ  
ま  
よそ  
と  
れ  
の  
つ  
つ  
く  
あ



かきかきと海と家物あして首尾とは掛くらぬあは  
やとけりく人掃なる善ごとくは那る物淋しき  
いねるは床結と枕ありあひいよき夏と人うり  
あふりうしと清のくめれくそくそくあひいよき  
色あそびとあひいよきあひいよきあひいよき  
りてよしとあひいよきあひいよきあひいよき  
河れいあひいよきあひいよきあひいよきあひいよき  
うくいあひいよきあひいよきあひいよきあひいよき  
あひいよきあひいよきあひいよきあひいよきあひいよき  
い枕とあひいよきあひいよきあひいよきあひいよき  
あひいよきあひいよきあひいよきあひいよきあひいよき  
あひいよきあひいよきあひいよきあひいよきあひいよき  
あひいよきあひいよきあひいよきあひいよきあひいよき

